

四條畷市未来教育会議（令和元年度第1回）

議事摘録

四 條 畷 市

1 令和元年11月25日 午後5時 四條畷市役所委員会室において、四條畷市未来教育会議を開催する。

2 出席者

未来教育会議委員長	東 修平
未来教育会議副委員長	植田 篤司
未来教育会議委員	和田 良彦
未来教育会議委員	藤原 由美
未来教育会議委員	白井 智子
未来教育会議委員	中原 健聡
未来教育会議委員	佐々木 千里
未来教育会議委員	二見 真美

3 事務局出席者

教育次長兼教育部長	開 康成	
総合政策部長兼魅力創造室長	藤岡 靖幸	
市民生活部長	山本 良弘	
子ども未来部長兼福祉事務所長	森田 一	
健康福祉部長兼福祉事務所長	松川 順生	
健康福祉部次長兼福祉事務所次長兼保健センター所長		豊留 利永
教育総務課長	板谷 ひと美	
危機統括監兼総合政策部次長兼秘書政策課長		喜多 計成
秘書政策課事務職員	安田 直由	

4 会議録作成者

秘書政策課事務職員	安田 直由
-----------	-------

5 案件

- (1) 未来教育会議の進め方について
- (2) 市の計画の中での教育大綱の位置づけについて
- (3) 本市における子どもに現状について
- (4) 今後の本市における教育の方向性について
- (5) 子どもの過ごす場所から見た役割と課題について
- (6) その他

<p>事務局 (総合政策部長)</p>	<p>定刻となりましたので、令和元年度第1回未来教育会議を開催させていただきます。</p> <p>皆様方におかれましては大変お忙しい中お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。</p> <p>四條畷市未来教育会議委員の委嘱状の交付につきましては、皆様の机上去配付させていただいております。</p> <p>本来であれば、委員の皆様お一人おひとりに委嘱状を渡しすべきところでございますが、この後の会議の進行上、誠に恐縮ではございますがご確認くださいますようお願いいたします。</p> <p>先ず、本日出席されている委員でございますが、現時点で7名となっております。藤原委員が少し遅れるとの連絡を受けてございますので、8人になる予定でございます。四條畷市未来教育会議規則第3条第2項の規定に基づき、委員の半数以上が出席されていますので、会議が成立することをご報告いたします。</p> <p>なお、和田委員におかれましては、この後所用のため、18時半頃には、会議の途中でご退席されるということで予めご報告いたします。また、本日の会議は最長19時までを予定としておりますので円滑な運営によりしくお願いいたします。</p> <p>それでは次に、本会議の委員長及び副委員長の役割についてご説明をさせていただきます。</p> <p>委員長におきましては、規則第2条第2項の規定により、市長が会務を総理し、本会議の代表でございます。</p> <p>副委員長におきましては、同条第3項の規定に基づき、教育長が、委員長を補佐していただきたいと存じます。</p> <p>なお、本日の会議につきましては、録音をさせていただきます会議録を作成いたしますので、お手元でございますマイクをお使いいただき、ご発言いただけたらと思っておりますので、ご協力の方よろしく願いいたします。</p> <p>また、今後の市広報誌等への掲載のため、会議の状況を総合政策部職員が写真撮影させていただきますので、あわせてご了承ください。</p> <p>ここで、本日の資料を確認させていただきます。</p> <p>次第が1枚と、資料番号が1番からホッチキス留めをしてあります、2、3、3が縦で、4がまた横になってまして、5と6という形で資料をご配布させていただいております。</p> <p>それでは委員長である市長の方からご挨拶を一言申し上げます。</p>
-------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

東委員長

皆さんこんばんは。

委員の皆様方におかれましては、大変お忙しい中にも関わりませ
ず、本未来教育会議にご出席を賜り、厚くお礼を申し上げます。あ
りがとうございます。

この未来教育会議というものは、市には総合教育会議という教育
委員会と、市長で構成される、教育行政の市長部局との意思決定等
を図っていく会議はあるのですが、今回それとは別に、それ
ぞれの各分野で様々なご活躍をされてる皆様方も交えて、未来の教
育を考えていくという場として設置させていただきました。

その際に、世間でも言われておりますし、我々それぞれも課題意
識はあるのですが、今まさに教育と言われるものが、新しくなって
いかなければならない、まさに機運が高まっている所と思います。

教育指導要領の改定のみならず、保護者の方々も、そして子ども
達自身も、これからどういう教育を受けていったらいいんだという
高まりがあるなか、ご案内のとおり、国としては文部科学省がリー
ダーシップを発揮して様々な取組みをされておるとはいえども、な
かなかこれまでの取組みを大きく変えていくというのは、国単体で
やっていくというのは限界がございます。

逆に言えば、四條畷市のような56,000人のまちですと、生
徒数、児童数というのも限られておりますので、先進的な子ども達
にとって最良の取組みを実施していきやすいという強みがあるの
ではないかと思っています。

つきましては、今やっている取組みをどう改善していくかという
考え方も当然重要なのですが、むしろ、何をどうしていけばいいか
というよりも、本来子ども達の教育としては、こういう環境の方が
いいよねと、我々はどうしても常に最初に予算みたいなものが出て
きてしまって、この予算の範囲だったら、これしかできないなとい
う考えになりがちなのですが、今回の未来教育会議という会議にお
きましては、あくまで未来を見据えて、あるべき姿というものを見
つめ直していった上でそこに向かってどんなことができるだろうかと。
つきましては、これは予算がかかるから難しいよねというよう
な議論にしていきたいなという思いがあります。

また、どうしても組織上、皆様ご案内のとおり、福祉部局とい
うのは市長部局にありまして、教育委員会というのは、また独立した
行政意思決定機関として存在しているなか、やはりこれからの公教
育、子ども達の環境を考えていく場合は、この福祉と教育の垣根を
いかに取り払っていくのか、あくまで子どもを中心において、ど
のように子ども中心で考えていけるのかというのも新たなテーマと思

<p>東委員長</p>	<p>っています。</p> <p>つきましては、この未来教育会議は、なるべく福祉だから教育だからというのではなくて、子どもを中心に据えた形の議論ができればと思っておりますので、何卒よろしく願いいたします。</p> <p>また、今回は、結論というものを置いて進めていくというよりは、後程、教育長からも説明があると思うのですが、子どもの生きる力を育てる。この「生きる力」という所に着目をして、皆様のお持ちの知見から、こんなことがいいんじゃないか、あんなことがいいんじゃないかと、とにかく第1回目は議論を拡散していけたらと思いますので、皆様お持ちのご知見を、たくさん忌憚なくいただければと思っております。少し長丁場になりますが、本日はどうぞよろしく願い申し上げます。</p>
<p>事務局 (総合政策部長)</p>	<p>ありがとうございました。それでは続きまして副委員長であります教育長からもご挨拶を申し上げます。</p>
<p>植田副委員長</p>	<p>皆様、こんばんは。副委員長を務めます四條畷市教育委員会教育長、植田と申します。どうぞよろしく願いいたします。</p> <p>まずは本日極めてご多用の中、このようにご出席いただきましてあらためて御礼申し上げます。</p> <p>私からは、ご挨拶も兼ねまして、課題共有ということで、3つ程、早速ご提示をしたいと思えます。</p> <p>まず、マクロレベルでいきますと、本年5月のスイスの国際経営開発研究所、IMDと言うそうなんですが、この世界競争力ランキング2019におきますと、日本はOECD36ヶ国中、30位という値であります。</p> <p>次に、2017年の合計特殊出生率、1.43ということで、やはりOECDの中でみますと27位。そして、厚生労働省の国民生活基礎調査によりますと、子どもの貧困率は、2015年時点で13.9パーセント、言い換えますと、7人に1人でございますけども、やっぱりOECDでみますと、平均13.3パーセントを上回ってるわけですね。</p> <p>こういったトリレンマ、三重苦と申し上げても良いかと思えますけど、これは本市においても同様というふうに捉えることができます。またOECDが示していますように、最終的にウェルビーイング、幸せなという所に、未来に子ども達が到達できるようにということが、恐らく私達、大人の役割であり責任ではないかというふうに考えております。</p>

植田副委員長	<p>是非、委員の皆様におかれましては、豊富な知見とそしてこの先、今、市長からもありましたけれども、達観ですね、これをしていただきまして、子ども達を導く羅針盤たる、そういったご意見を賜りたいと存じます。どうぞよろしくお願いいたします。</p>
事務局 (総合政策部長)	<p>ありがとうございました。以降につきましては委員長に議事進行をお願いしたいと存じます。それでは委員長、会議の進行をよろしく申し上げます。</p>
東委員長	<p>それでは初めての今回未来教育会議ということでございますので、委員の皆様から簡単にですね、自己紹介をお願いできればというふうに思っております。</p> <p>和田委員から時計回りの形をお願いできればと思います。</p>
和田委員	<p>はい。それでは、最初に自己紹介させていただきます。</p> <p>今、大阪教育大学に勤めております和田と申します。よろしくお願いいたします。</p> <p>今、所属は教職教育研究センターっていう所におりまして、教員養成、特に教員免許を取るための科目を中心に教えております。大阪教育大学に行く前は、大阪府教育委員会で勤めておりまして、20年間大阪府教育委員会にいて、そこで退職したということでございます。</p> <p>教育委員会にいる時はどちらかというと高校のことを中心に仕事をしてきたのですが、大学では、主として小学校で教える人達に、授業をしている状況でございます。</p> <p>私も、まだまだ経験が狭いですが、私が持っている知識を活かして使っていただけたらという思いで出席しています。よろしくお願いいたします。</p>
中原委員	<p>失礼いたします。中原健聡といたします。</p> <p>私自身が今、経営に関わっている教育機関や団体は2カ所あります。1つは認定NPO法人Teach For Japanという組織です。Teach For Japanは世界53ヶ国に展開するTeach For Allの加盟団体であり、「全ての子どもたちが素晴らしい教育を受けられる世界」の実現をめざし活動しております。</p> <p>具体的には日本の教員養成・採用・研修と教員免許制度の改革から、教育環境・機会格差の是正に取り組んでおり、自治体と連携し</p>

<p>中原委員</p>	<p>て臨時免許や特別免許の利活用によって、教員免許の有無にかかわらず、原則2年間学校現場に先生を配置するプログラムを運営しています。</p> <p>2つめは札幌新陽高等学校という私学の経営にも関わっております。そちらの方では主に、学校開発・経営をサポートし、職場環境の改善、カリキュラムの開発などを2017年から携わっております。</p> <p>私のVisionは、生きたいように生きる人があふれる社会をつくることであり、人が育つ環境をデザインすることをMissionに活動しています。どうぞ、よろしく願いいたします。</p>
<p>藤原委員</p>	<p>大阪府就業促進課の藤原と申します。今日は遅れましてどうも申し訳ありませんでした。</p> <p>私の方はですね、大阪府の商工労働部の方で就職支援をさせていただいております。就職支援ですので、対象は大学生と高校生、あと実際働いていない成人の方々ということになってくるのですが、大学生、高校生の就職支援をしているなかでですね、今、非常に就職環境は良いのですが、しかしやはり一定数働いていない方っていらっしゃるんですね。その原因は何かと日々考える所ではあるのですが、やはり現場の方で話していると、高校生或いは大学生になってから、支援をしてもなかなか実際には就職に結びつかなくて、それまで以前のことは大事だよねという話に帰結することが非常に多くございます。</p> <p>この会議ではですね、私の持っているノウハウが役に立つかどうかはあるのですが、皆様からいろいろ勉強させていただきたいというふうに思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。</p>
<p>二見委員</p>	<p>臨床心理士の二見と申します。私は、大阪府スクールカウンセラー、チーフスクールカウンセラーとして、今、四條畷市でのチーフスクールカウンセラーをさせていただいております。</p> <p>配置としては四條畷中学校の方に週1回ということで配置させていただいてまして、校区の小学校含め、ここ2年程前に統廃合がありましたので、校区の小学校が4つということで、日々、四條畷市の子ども達とか保護者さんの現状、今、何に困っておられるとか、そういう状況について、実際に携わらせていただいております。</p> <p>今回の会議では、私が、実際直接関わっている子どもたちの現状についてお伝えすることで、四條畷市の教育において、どのように</p>

二見委員	<p>いい効果を現せるかということについて、尽力できればと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。</p>
佐々木委員	<p>皆さんこんにちは、佐々木と申します。</p> <p>私の方は大阪府教育委員会の北河内の中のチーフスクールソーシャルワーカーということで今回呼んでいただいておりますが、直接的に現在四條畷市に関わっている者ではありません。</p> <p>ただ、もしかすると、自分がお役に立てるのは、複数の自治体でスクールソーシャルワーカーのスーパーバイザーを務めていることかもしれません。そういうところで、様々な所から見えてきた課題の共通項であったり、どういう方向性が一番費用対効果の高い子どもの環境を作っていけるのかということにつきまして、包括的に捉えた内容をお話できるかなというふうに思っておりますので、どうぞよろしく願いします。</p>
白井委員	<p>白井智子と申します。</p> <p>私は大阪と福島を中心にですね、全国10ヶ所程で、不登校とか引きこもりとか発達障害とか、いろんな課題を抱えたお子さん達の支援の場を運営しております。</p> <p>この辺でいうと、1つは池田市という所ですね、日本で初めて公設民営型のフリースクール、廃校活用したフリースクールを運営しておりましたり、箕面市では、まさに子どもの貧困の連鎖を止めるというための放課後の学童保育の運営をさせていただいています。</p> <p>私自身のミッションは、とにかく、全ての子どもを取りこぼさない教育をということで、それこそ国の審議会とかでもいろいろ発言をさせていただいているのですけれども、今、不登校の子ども達も、全国で16万人以上出ているということで、残念ながらその全ての子どもに適切な教育を供給できていないということを、国が認めてしまってる状況というところのなかからですね、本当に全ての子どもを取りこぼさない教育が、さきほど市長が仰っていた人口56,000人という所で、手が届く教育というのが、そこに近づけるんじゃないかという夢を持って、今日は参加させていただきました。どうぞよろしく願いいたします。</p>
東委員長	<p>ありがとうございます。それでは自己紹介をいただきましたので、早速、次第に従って進めさせていただければと思います。</p> <p>まずは案件の1としてですね、未来教育会議の進め方についてご共有させていただければと思いますので、事務局からお願いいたし</p>

東委員長	ます。
事務局 (総合政策部長)	<p>それでは資料番号1、横向きのものの1ページ目をご覧ください。第1回目といたしまして、本日、11月25日に、本市の子どもの現状や今後の教育の方向性、またその方向性に向かって進めていく時の課題等につきまして委員の皆様へ専門的な見地からご議論いただけたらと考えてございます。</p> <p>次に第2回目といたしまして、年明けの1月29日に、今回第1回の議論を踏まえた各課題の現状等についてさらにご議論いただいたうえで、今後の本市における教育の方向性を具体化できればと考えてございます。</p> <p>そして第3回目、この第2回のご議論を踏まえたうえで、3月30日におきまして、教育大綱の素案を作成できればと考えてございますので、よろしく願いいたします。説明としては以上になります。</p>
東委員長	<p>ありがとうございます。本日におきまして、自己紹介いただきましたようなそれぞれの委員さんの専門的知見をお示しいただくなかで、一旦議論としては幅広い形で議論できればと思っております。</p> <p>第2回で具体化という作業に入っていく、第3回でまとめていくという方向性を考えております。</p> <p>何かこの時点でご質問とかあればと思いますがいかがでしょうか。よろしいでしょうか。</p> <p>それでは続いて案件2といたしまして、本市の計画の中での教育大綱の位置付けという所について事務局から説明をお願いいたします。</p>
事務局 (総合政策部長)	<p>それでは資料番号1の2ページをご覧ください。教育大綱の位置付けについてのご説明をさせていただきます。そもそも教育大綱は平成27年4月に改正されました地方教育行政の組織及び運営に関する法律におきまして、「地方公共団体の長は、教育に関する総合的な施策の大綱を定めること」とされ、これ以降ですね、全国の自治体で教育大綱が制定されてきております。</p> <p>なお、全国的には市長が定める教育大綱と教育大綱を参酌しつつ、教育委員会で定める教育振興基本計画は別々に定めてるところが多くなっている状況でございます。</p> <p>しかしながら、本市におきましては、国の法律改正より前の平成26年度を初年度に教育に関する総合的横断的な施策を掲げた、教</p>

<p>事務局 (総合政策部長)</p>	<p>育振興ビジョンを策定してございました。このことから、このビジョンを、理念等を定める教育大綱と理念を踏まえつつ基本方針並びに分野ごとに施策等を示す教育振興基本計画合わせた一体的なものとして、平成27年4月にこのビジョンを、教育に関する大綱として位置付けることといたしております。</p> <p>2ページの資料の左の所につきましては、市の最上位計画である総合計画を示してございまして、その中の子どもに関する部分から関連するものを教育振興ビジョンに位置付けるとともに、その分野に関連する各計画においても、教育振興ビジョンに位置付けている状況となっております。そのため先程ご説明しましたとおり、本ビジョンについては、理念と計画が一体的なものであったため、これまで教育に関連する施策を見直す毎に、教育振興ビジョンの見直しも行ってきた経過がございます。</p> <p>ここで資料の3ページをお捲りください。そこで今後は、本市の教育に対する普遍的な大綱は、大綱として独立して定め、具体的な施策、事業は柔軟性を持たせるため、平成26年度から令和2年度までの期間として定めている本ビジョンについて今年度から改定作業進めていく際には、他の多くの自治体と同様に、教育大綱と教育振興基本計画のそれぞれを分けて策定することといたしました。</p> <p>なお、教育大綱の策定におきましては、この未来教育会議での議論を踏まえ、市長と教育委員会が教育行政等について協議調整を行う総合教育会議において意見交換を行い、最終的に市長が策定することになってございますので、ご了承いただきますようお願いいたします。説明は以上です。</p>
<p>東委員長</p>	<p>ありがとうございます。もともと教育振興ビジョンというものが、教育大綱を作りなさいと国が示す前から本市としては持っておりまして、それが理念も個別計画も1つになった形でした。ただ、やはりそうすると、変更がある度、理念も含めた全体の変更となってきてしまっていたので、今回、教育大綱は教育大綱として理念として定めていくということが、大きくこれまでとの変更点です。</p> <p>この未来教育会議の場では、その教育大綱を、特に我々としてはここを重点的にやっていくんだというものを、載せていきたいなと思っていますので、そういう理念をしっかりと定めていく今回の会議にさせていただけたらと思っております。</p> <p>この整理について、少しややこしかったかもしれないのですが、何かご質問等があれば伺いたいと思いますが、よろしいでしょうか。それでは次に案件3として、早速進めさせていただければという</p>

東委員長	<p>ふうに思います。</p> <p>先に教育長から、今後の本市における教育の方向性についてという所で、これまで取り組んできたこと、今後考えているところを、簡単にではございますが、委員の皆様にご説明をさせていただければと思います。</p>
植田副委員長	<p>それではお手元の資料、合わせて画面の両方をご覧いただきたいと思います。</p> <p>流れとしては過去の経緯、そして今後という意味も踏まえて、とりわけ本年7月に、先にこの未来教育会議を踏まえた教員へのヒアリングを行っておりますので、ご紹介も兼ねて説明したいと思います。</p> <p>それでは、先ずこれまで教育振興ビジョンがありましたが、それを踏まえた学力向上3ヵ年計画が、平成24年から、3ヵ年を一区切りとしまして、第1期、2期、3期とあります。ちょうど今第3期の真ん中のタイミングにあります。それぞれの詳細は割愛いたしますけれども、概ね、授業に関すること、そして家庭学習フォローアップという大きなこの2軸から、それぞれの取組みを進めてまいりました。</p> <p>1期なのですけれども、ここにありますように授業力等ですね、こういった1つの基準を見ながら、先ず立ち上げをしまして、第2期では、課題に着目をし、そしてこのキーワードであります、なわてブルーミングプラン575というものに代表されるようなフォーカスポイントを持って進めてまいりました。</p> <p>ここをクローズアップしますと、いわゆる家庭と学校と地域というこの3点でもって、強化ポイントと見ているわけです。</p> <p>1つ着目しますと、10まで運動というのがあります、これは何かといいますと、スマートフォン、携帯電話を10時までを使うのを止めようということで、これは大阪府が進め、全国に展開が進みつつあるスマートフォンの学校への持ち込みを含めたあり方の先鞭をつけたのではないかと思います。そういったことで、この家庭、学校、地域という役割を明確にして、そこで学力向上をめざしたわけであります。</p> <p>そして今、第3期でありますけれども、これも概括しますと、ここにあります文科省の新学習指導要領の3点です。いわゆる知識、技能、それから思考力、判断力といったもの、そして学びに向かう力、人間性というものに代表されるかと思えます。</p> <p>こういった取組みを進めてまいりまして、第2期の中では、授業</p>

<p>植田副委員長</p>	<p>スタンダードを確立しまして、とりわけユニバーサルデザイン化を図ってまいりました。</p> <p>こうすることで学力向上の道をつけてきたと振り返ることができると思います。</p> <p>このようなり取組みを積み重ねてきたわけでありますが、こちらが現状でございます。全国学力と学習状況調査です。これは先ず小学校、本市は現在7小学校ありますけれども、その中のこれが全国との比較であります。結論から言いますと、全国を1として表現していますから、1より高ければ全国より高いということになるのですけれども、算数につきましては0.96、また、国語につきましては0.88という結果です。ちなみに令和元年度から、主に知識を問うA問題と、活用の力を問うB問題という区分はなくなっております。</p> <p>次に中学校です。令和元年度数学、国語はやや1を下回るという結果になっています。ただし、英語についてはちょうど1.0ということで、これは本市において小学校の頃からALTを含めて、大変力強い英語教育を継続してきた結果と見ております。</p> <p>続きまして、実態です。</p> <p>先ず、正答数の分布で見ってみました。平均で0.88といってもこれは具体的なものを示しませんので、少しブレイクダウンしますと、いわゆるたくさん正答した子ども達の数、この棒グラフが本市、折れ線グラフが全国です。</p> <p>つまり、この部分に乖離があることが、この値に帰結してるのかなと考えられます。同じように、算数もこのたくさん正答した子ども達が若干上位において少ないという点がこの結果になっているかもしれません。</p> <p>そして飛び抜けているところの部分、こちらは上位の所にきていて、この辺りが値に影響してるかと思えます。</p> <p>次に中学校です。</p> <p>国語、数学、0.92、0.94。これもたくさん正答した子ども達が若干少ないという点が1を割っている原因かと思えます。ただし、ご覧のとおり、英語は見事に全国の値とほぼほぼイコールでありまして、このような結果に表れているかと思えます。</p> <p>次に、今は正答数に着目したわけですが、次に無回答率、これに着目をしました。これは1より多いと無回答が多いとみるわけですが、残念ながら小学校の場合には、国語、算数含めた総合が1.3ということで、全国でも無回答率はやや高いということが示されます。中学校で総合1.11ということなのですが、自分の思いや</p>
---------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

<p>植田副委員長</p>	<p>考えを記述する問題において無答率が多かったということが示されています。</p> <p>では、それに対してもう1つの状況調査ですが、アンケートについて解答時間はどうだったかということを質問しています。何れも、この1番左側のこのグラフで、上が全国、下が本市なのですけれども、時間が余ったと回答している子ども達が全国に比べて多いのです。</p> <p>よって両極の推察ができるわけです。つまり学力が高い児童生徒層においては、問題量が少なく問題が簡単だったというようにも言えるでしょうし、学力が低い児童生徒層にしてみれば、ひよっとしたら諦めているということが推察されるわけであります。</p> <p>次に自己肯定感に関する調査です。自分には良い所があると思えますか、ということについて、当てはまる、どちらかといえば当てはまるという肯定的回答、確かに過半数は超えておりますが、全国に比べるとやや低いとあります。そして、将来の意識、将来の夢や目標を持っていますかということについても同様に、肯定的回答は過半数超えておりますが、全国に比べるとやや低いという結果になっています。</p> <p>そして家庭学習時間、いわゆる月曜から金曜1日で、どれ位家で勉強していますかということに対して、全くしない、と、30分以内、と回答した児童生徒の割合がやはり全国に比べて多いです。こういったところに、課題がみえてくるかと思えます。</p> <p>では続きまして、学力のもう1つの指標たるNRT、全国標準学力検査です、結果は偏差値で表します。従いまして、こういった内容でやるわけなのですが、本市においては結論から申し上げますと、このような結果でありまして、残念ながら全体として小学校の場合に、50に到達していないということと、もう1つ、理科ですね、これがかなり下回っているということ、これは中学校でも同様に、理科に課題があるのかなということがこのグラフからは見えるわけです。</p> <p>ただしこの色、これは英語ですけども、英語は51.0ということで、先程の学力検査と同じように、やはり英語については、これまでの積み重ねが功を奏したのかなということが見てとれるかと思えます。</p> <p>以上、このような現状を踏まえまして、学校10校、各教員に全てヒアリングを行いました。</p> <p>その中の極一部なのですが、例えばこういった子ども達の興味関心が学習よりもというような観点、つまり想像力を高めると</p>
---------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

植田副委員長

いうことにポイントを置かれた意見もありました。そして生きていく上でこれはおかしいと気付く力、それから、特に昨今強まっていると思いますが、いわゆる他人に合わせてしまって、自分の意見をしっかり伝えられない、だからこそこういった点を強化すべきだという意見。それから、これはもう根幹に関わるんですけど、所得格差によるもの、これに対して連携したフォローが必要というご意見。そして、象徴的だったのが、美術科の授業でも、「どうすれば良い点数になるか」を質問してくる生徒がいる、ということで、こういった個性とか、そういったものに対して認め合うことが大切であろうという意見もありました。

それから同じく中学、1年から3年の全ての学年が、この1つのことに取り組むことで、いわゆる縦の繋がりができ、これによって、交流、協力、まとめ、伝える力が育まれるだろうと。これらのご意見を各教員からいただいた次第であります。

そういったなかで、先ず、この情報共有という形でさせていただいたのが、現在の学校が担う領域という意味では、教育のみならず、一部の福祉領域、医療領域もということです。当然そういう知識、スキルを持って対応しているという現実。そして学校、家庭、地域の役割というこの観点が重要であろうということをご共有させていただきました。

そしてこの未来教育会議においては、今後、現在から未来を見通した場合に、当然ながらこのグローバル化とデジタル化は、市、国、そして世界の恐らく垣根を越えて、多分共通項となる部分も大きいらしいということで、認識をする必要があろうと感じた次第です。

そして、何よりも、この産業革命については、1700年代の第1次産業革命から、2、3、4と進み、この第4次産業革命で社会が大きく変わるという予測、それからこの農耕牧畜社会から数えますと、1、2、3、4、5ということで、Society 5.0と言われているわけなのですが、そういった社会・産業の構造が変われば、生産方法が変わり、働き方は変わって必要とされている教育等も変わっていくだろうと、このような流れで共有をさせていただきました。

とりわけ、こういったパーソナライズ化とかカスタマイズ化というものが、恐らく、ICT、AIの能力とともに教育の現場も大きく変わるだろうという観点も必要かと思えます。

ここだけ細かくなりますけれども、私たち、人工知能をはじめテクノロジーに対して、おぼろげながら理解はするのですけれども、

植田副委員長

やたら過大評価をしてみたり、また、過小評価をしてみたり、そういったこともあろうかと思ひまして、こちらに1つの考え方なんですけども、表現してみました。

結論から言いますと、要点を述べますとA I、ロボットのテクノロジーは大きく3つのカテゴリーに区分され、これがいくつか組み合わせあって、この動きが仕事へ影響を及ぼしているということがわかります。

よく、仕事が取って代わられるという非常にステレオタイプな捉え方をしますけども、実はそうではなくて、個別のタスクが置き換わって行って、その仕事自体が大きく、自律化するというふうにみていかと思います。このあたりが、今後、子ども達に身につける力というものにかなり密接に関わってくるのかなというふうに考えます。

一方、一例ですが、なかなかA I、ロボットに難しい仕事ということで、敢えて3つ挙げました。

これは、1ミクロンを計測するという仕事、つまりこれを測ろうとすると、さらにこの一桁二桁、さらに精度の高いロボットを作らなきゃいけない。そういうことができるんでしょうか。経済合理性でどうかという点。

それから、こちらは高電圧が発生している中で作業するロボット、A Iは動くんでしょうかという話。それからこちらは一昨年ですかね、もっと前ですかね、九州で大きな陥没がありました。こういった下水、水道、電線やら、みんなズタズタになっているのですけれど、これを修復するのはどうしたらいいかというようなことです。結局、こういう国家資格に準ずるようなところの仕事というのは、実はA I、ロボットには難しいと言われていているわけで、いわゆる、経済合理性で導入が見合わないとか、誤動作故障が生じやすいとか、現場現物合わせないと、どうしようもないという、これらの点が、ひょっとしたら子どもたちの身につける力と関連してくるのかもしれない。

さらに学校に在籍している等の子ども達を大きくとらまえた際に、今こういう状況にあるというのが文科省の学校基本調査からわかります。現在において、1学年約100万人です。その子ども達が小、中、義務教育を終えると、およそ7割が普通科、総合科の高校に行って、専門高校に27パーセント、その後、特にこの普通科、総合科の高校では数学ができるかで、文系か理工系を大体分けて、多分、委員の皆様方の頃と同じです。今もこれは続いています。そしてその後、大学に進む割合がおおよそ5割、就職が18パーセント、

<p>植田副委員長</p>	<p>短大、専門学校が22パーセントというわけなのですが、こういった現状の中で、この文系出身者の課題と、もう1つは、赤で書いていますが、無業で卒業してしまっている、高校卒の場合で5万人、大卒でも4万人。そして専門学校等のところはよくわかりませんが、何万人かが、無業のまま学校を出ているという現状。ですから、100万人のうちの数でいいますと、1割以上が実は無業のまま、毎年社会に出てしまっているということですね。こういった点も、もう一つの大きな課題かなと思います。</p> <p>さらにいうならば、正規雇用、今年度の最新データは43万人になっていましたけども、正規雇用でどれだけ働いているかということ。例の非正規のたくさんの方々を救済するというそこだけスポットライトあたっていますけれども、実は毎年これだけ多くの方々がなかなか、困難なところにいらっしゃる。さらに大学中退者は、年間、8万人という数字が公表されております。本当に子ども達が、自分が生き生きとして、これから進んでいく道というのは何なのかという所から考えていく必要があるかなと思った次第です。</p> <p>では1つ、仮説を示します。敢えてこの場でございますから、ハイスキル、ミッドスキル、ロースキルという表現を使わせていただきますけれども、現在はこちらかということ、このボリュームが就業人口だと思ってください。ハイスキルとロースキルは当然少なくてミッドスキルの方がたくさん職についていらっしゃるという見方をした場合に、おそらく文系大卒の方が多くてこういうボリュームのゾーンを形成している。ここがおおむね10年以内に実はAIとロボットに代替されていって、こういった就業構造（鼓型）に変化し得るのではないかと言われています。特に、この上位の方は、いわゆる、今、AI人材とかも言われていますけれども、それ以外にもマネジメントだとかビジネスを新たにクリエーションするとか、こういったハイスキルの人材が人手不足で高賃金化していくということに対して、今後、建設や農業、介護、造船、宿泊、この5業種、加えてさらに漁業や外食なども、外国人就労ということについては、門戸が開かれていますので、ここにはたくさん外国の方が入ってこられるだろう。ただし、こちらは人手不足だけれども低賃金化する。この背景には当然日本の少子化がありますので、ここに就く人は当然少ない。ただし、外国の方との競争もあり得るだろう。ということで、あくまでも大胆な仮説なのですが、ここをAIやロボットが浸食するというよりは、それを取って代わった方が経済合理性が高いという社会がおそらく2030年代かなと想定できます。</p> <p>よって、これはあくまでも1つの例示ではありますが、既</p>
---------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

<p>植田副委員長</p>	<p>に世界では先行しているSTEAMの教育で、これを強化しながら、仕組みがわかる勉強の積み重ねが重要で、仕組みはわからなくても使えれば良いというのではない、そういう人材に育ててほしいなという期待はあります。</p> <p>さて、現実をみてみますと新入社員で何々に対する何々の割合が何%かということが理解できないということが生じています。論理的思考については非常に厳しい状況にあるかなと思います。また、このあたり是非、現実社会の中で委員の皆様方の知見をいただきながら、そこから戻ってきて、では学校教育でどうするか、家庭教育でどうするか等という点に言及いただけますと大変ありがたく存じます。</p> <p>ちなみにこちらはOECDと文科省が昨年、共同セミナーを開催していた中からの抜粋でございます。</p> <p>以上、簡単でございますけどもご紹介をさせていただきました。</p>
<p>東委員長</p>	<p>これまでやってきたことと、今後の社会を見据えて教育長としてこういう方向性がいんじゃないかという所をお示しいただいたところでは、併せて、四條畷市の現状、こうした子ども達を支える環境という点を、資料は無いのですけれども、私から簡単に、口頭でお伝えできたらと思います。</p> <p>何よりも四條畷という所は、実は福祉について、以前から力を入れてきておまして、例えば虐待とかそういう分野においては、しっかりと予算や人を配置し、個別施策というところは十分に組み立ててきたのではないかという思いはあります。</p> <p>ただ、まだまだ更にそれを強化していきたいという思いで、ネウボラという考え方、北欧由来でありますけれども、それぞれ子育てをしている各家庭が取り残されないようにと、「ネウボラなわて」という事業を始めています。どういうことをやっているかというのと、「こんにちは赤ちゃん」事業という形で、赤ちゃんが生まれたご家庭には市の職員が行きます。その時に、1万円分くらいの子ども服のプレゼントを持っていきまして、「今後、何か子育て等ご相談あったら聞かせくださいね」ということをお伝えすると同時に、その後、また地域の民生委員・児童委員さんもお訪問いただいて、「民生・児童委員として我々が担当です。何かお悩み事があったら直ぐにご相談ください」とお伝えするのに加え、2分の1バースデー事業というのもやらせていただいている、初めての子育ての方は半年ぐらい経つと、またいろいろな悩みが出てくるだろうということもあるので、半年経つと職員が訪問させていただいて、「子育ての悩</p>

東委員長

みは無いですか」とお伺いするような事業など、かなり丁寧に、顔と顔を突き合わせながら、事業をさせていただいております。

そういうことを進めていくと同時に、保育というところでは、本市公立子ども園、保育所というのが計2園ありまして、それぞれプロジェクト型保育という形で、子どもの関心、興味を引き立てるような、従来の保育とは違う形の授業、これをしっかりと展開させていって、子ども達の興味、関心、学びという所を育てていこうというような取組みはさせていただいておりますという状況です。

産前産後含めて、一定整備は進めてきているかなという状況にはあるのですが、現実として数値を見ますと、例えば、小学生に上がっていった場合に、例えば朝食の欠食率というものをみてみますと、全国は大体5.5パーセントぐらいなのですが、四條畷はそれよりも高くなってしまっており、6.4パーセントという結果になっており、朝食をしっかりと摂れずに授業に来てしまっているというお子さんの割合は全国よりも高いという状況でございます。

また、中学校でみても、全国だと欠食率8パーセントなのですが、四條畷は10.2パーセントと、今度は2パーセントも上回っているので、やはり、直接学力と結びつけるわけではないのですが、行政としてそれぞれ産前産後含めて、福祉的なカバーを進めてきているとはいえ、こういった朝食欠食率などの所に数値としては表れてきてしまっているのかなというふうに思います。

また、今のは小学生、中学生の状況なんですけど、例えば乳幼児の乳幼児健診、これを受けてくださってないご家庭というところを見ても、これだけ出産直後に訪問させていただいたり、半年で訪問させていただいたりはしているのですが、この乳幼児健診の未受診率というのも、実は府平均よりも高いという状況になっていて、例えば4ヶ月健診ですと大阪府平均が3.7%というところが、四條畷は4.6%という状況になっているので、きめ細かに、顔と顔を突き合わせて、「我々が担当ですよ。何かあったら相談してくださいね」という状況の中でも、未受診率というものは大阪府平均よりも高くなってしまっている。朝食というものをみた時も欠食率が高くなってしまっているというような状況があります。

そうしたなか、教育長がお示しいただいたように、学力という所も、なかなか全国平均にも追いついてはきていないと。この後、また委員の皆さんからご意見をいただきたいと思うのですが、行政それぞれの部署、課でやるべきことを、国や府から示されてきていることはきっちりと進めてきてはいるものの、数字としてはなかなかそこに追いついていない。我々も現状やれることはなるべくやって

<p>東委員長</p>	<p>いくつもののですが、まだまだ足りていないと。</p> <p>では一体これから、先ほど教育長が示していただいたような、新しい教育等が必要になってきているなかで、どういう取り組みをしていったらいいんだろうかと。先ほど白井委員からもありましたけど、それを取りこぼさない形でやっていくにはどうしていったらいいんだろうかというところを、我々もいま考えあぐねているというのが正直な所です。</p> <p>ですので、こんな観点があった方がいいんじゃないか、こういう所はどうなっているのかということ、これからの委員の皆様にお伺いしていただけたらというふうに思っております。</p> <p>さて、教育と福祉と混じった形になるので、先に、教育長の方からお示しいただいた今後こういう子ども達に育てていったらいいんじゃないかとか、学力の話が中心になりましたけれど、恐らくどんどん学力というもので測れない世の中になってくるなかで、どういうふうな学びをしていったらいいのか、それに伴って、先生はどういうふうな状況になっていったらいいのか、その辺りについて、委員皆様にご知見があると思いますので、まずよろしかったら、例えば、和田委員から今のお話等を受けてこういう観点等があればというお話をいただけたらと思いますが、いかがでしょうか。</p>
<p>和田委員</p>	<p>先ず植田教育長が示していただいた資料の中で、例えば、全国学力学習状況調査の中で、無回答率が非常に高いということに私はすごく気になりました。といいますのは、例えば、今、社会人基礎力とかそういう言葉で、社会に出てから活躍する人材の資質について研究がされています。その中で一番重要なのは、忍耐力だということと言われています。つまり、困った時にも頑張ろう、何とかこの事態を切り抜けよう、何とか取り組もうというそういう気持ちがある人は、結局社会に出てから、職場に馴染むことができるとか、そこで活躍することができるという結果が言われています。</p> <p>そういう意味で、わからなければそこでパスしちゃうというのではなくて、少しでもやはり記述式は書くとか、そういう形で意欲が出て欲しいなと思ってまして、そこのデータについて気になっていたところです。</p> <p>あと、先程、市長が福祉の観点でいろいろな取り組みをされているということを仰っていましたが、小学校での欠食率ですね。これが高いうていうのは、やはりこれは学力と完全に比例しているというか、影響しているというふうに私は思いますし、また、きちっとしたデータとして出ているかどうかはわかりませんが、そういう意見</p>

和田委員	<p>は多く聞きます。頭に栄養が回らないと、やっぱり学ぶための知識が入ってこないということですので、そういった面でも、欠食率を下げることは重要なことというふうに思いました。</p>
東委員長	<p>ありがとうございます。中原委員もその学校現場の経営に携わっておられるということなのですけれども、今の、これからの学校教育という所と、子ども達の教育という所で、ご意見をいただければと思います。</p>
中原委員	<p>まずは学力の観点ですが、先程のテストの所ですね。札幌新陽高等学校が設計した探求コースでは、学力というものを偏差値ではなく、経験値という観点で捉えています。識字率などが、就業するうえで重要な点だと思うのですが、今までの価値観である学力という観点が、この先の2030年、2050年における学力だとは私は考えていません。今回のこれからの教育をつくる未来教育会議という所で、まずその教育の効果を一度再定義する必要があると思います。</p> <p>私が教育関係者や保護者、様々な大人と話す中で、18歳の偏差値をめざすような会話が多くなってしまいました。また、大学入試についての話ばかりしています。私が設計している探求コースでは、大学入試だけをめざすことはしないと明言しています。</p> <p>教育は人生を創るプロセスであり、学歴を求めるものではないので、大学入試がどうであろうと、そこは問題ではないという意思を示しています。</p> <p>また、教員の養成・研修等の成長の機会やプロセスが重要になります。なぜなら、教育効果を評価するうえで、教員の考え方が、根本的に重要だからです。テストの点数だけの軸ではなく、多軸で生徒の成長を捉えられるスキルや仕組み作りが必要です。</p>
東委員長	<p>ありがとうございました。少し、補足させていただきたいんですけど、例えば和田委員が仰っていただいた、なるべく無回答を無くしていく、これは自分の意見を回答に反映させ得るようにしていこうという、ひいては自己肯定感とかとリンクしてくるところかなと思います。あるいは、欠食率というのは数値を取れますので、なるべくこの割合を全国に近づけていったり下げていくこと、これはできるかなと思うのですが、例えば今、中原委員仰っていただいたような、親御さんの気持ちを考えたら、とはいえまだまだ大学入試って今の社会ではどちらかというと重きが置かれていて、やっぱ</p>

東委員長	<p>り自分の子どもには学力も一定つけて欲しいなというような保護者の方もまだまだたくさんいらっしゃる。ただし、現状はロボットというところが出てくるなかで、別のスキル、経験値が求められてくるというようななかで、市としても人や予算をしっかりと教育につけていきたいなと思った場合に、やっぱり一定測っていかねければならない指標みたいなのが無いと、年間的に予算をつけていくところでは難しいのかなと思うのですけれども、何かこう、一概に数値、そもそも数値を測るということ自体が、もしかしたらナンセンスかもしれないんですけど、何かどういふものを置いて見据えていくというか、測定値として捉えていったらいいかみたいなのってあるでしょうか。</p>
中原委員	<p>確かに定量的に何かを表すということはすごく重要な点ではあるのですけれども、そこに拘ってほしくないとも思います。アセスメントツールとして、例えばQUといわれる学級満足度児童生徒のソーシャルスキルを可視化するものはあります。しかし、それよりは、日頃の子供達の様子をどのようにすれば毎日ログを取れるかということだと思います。そこには、普段のコミュニケーションも含めます。</p> <p>札幌新陽高校の探求コースでは、100分設計の中で、10分程しか教員が集中して話す時間は無いので、残りの90分間程は、子供達の様子を観察してデータを取っています。その記録から、一人ひとりの特性、学習認知経路等を把握し、学習科学の学術機関と連携してデータを整理し、一人ひとりの子の伸び率を出しています。</p>
東委員長	<p>ありがとうございます。子供達の様子とかをどれだけ具に観察していただけるかというところで行きますと、二見委員にお伺いしたいのですけれども、やっぱり普段から本市の子供達、保護者と接していただいている中で、先ほど様々な学力の状況とか、今の欠食率の状況とかをお伝えさせていただいたのですけれども、現場に携わっていただいている、どういう観点でも、改善というか課題というかそういうご意見があればいただければと思います。</p>
二見委員	<p>今のご質問も含めてなのですけど、最初にどんな子供に育てていきたいかというような所と言えば、現場でいつも思っていることですが、主体性を持った子供に育てたいということだと思います。生きる力とかいうことも同じだと思いますし、私が主体性ということを思う理由というのは、先程のこともあったんですけど、今の</p>

二見委員	<p>子ども達はすごく忙しくて、まわりからやらされてる感が多い。それは塾でもそうですし、学校でも、例えば、定期テストの時に、ノートやプリントを全部出せと、提出しろと学校から言われる。学校側から言えば、子どもがそれを提出することで、試験勉強になるからいいだろうというような意図もあるのですが、私のところに相談に来る子ども達の中には、提出物が出せなくてもう死にたいとか、夏休みの宿題ができなかったから死にたいと言って、とてもしんどくなってる子どもが多くてですね、死にたくなるくらいに提出物があるのかと。</p> <p>提出物を楽々とできる子どもももちろんいて、そこはきっといいのでしょうけども、やっぱりそれを負担に感じている子どもも一定数いる、塾なんかに行っていたら、塾の宿題もたくさんあると。受験を見据えてのことという所もあり、また親御さんの意図もあると思うんですけども、それもわかるんだけども、子どもたちはそんなにもやらされている感があって、主体性なんか育つのかなというも思っていますね。やっぱり主体性を育てるためには、心理的に言ってもですね、先程出ていたように、自己肯定感といったことがすごく関与していて、子どもたちに安心できる居場所があったり、それが学校だったり、お家だったり、例えば先程出ていた、地域にも居場所があって自分が安心できるっていう所だったり、子どもが自分はこれでいいんだと思えることで主体性ってどんどん育つと思うんですけども、そんなにいっぱいやらされてる感があって、もうしんどいと、次から次へといろんなことやらされていて、子どもが主体的に、実際じゃあどうしたいって言っても、もうわからへんっていうような回答がかなり多いところを見ると、主体的に生きる力を持った子どもを育てたいけれども、学力をつけたいから子どもに良かれと思っていっぱいやらせるっていうことで、結局何か悪循環っていうか、その主体性が育たないなっていう感じを現場にいていつも思います。</p>
東委員長	<p>そうですね。学力を上げてあげたい、だからいっぱいやらせる、でも結果、主体性が育たないという循環。</p>
二見委員	<p>悪循環になっていて、教員側が、じゃあどうしたらいいかっていったら、先生方も学力つけさせてあげたいから、良かれと思ってすごく課題を出すし、指示も出すけど、それでは子どもたちが自分で考えてどう勉強しようとか、自分がどういうふうになっていきたいとかっていうようなことを、考える暇がないというような、そ</p>

<p>二見委員</p>	<p>ういう印象がすごくあります。大人は子どもに、教える、やらないから怒る、ルールをつける、それを守らないから怒るっていう、守れないルールがたくさんあればある程、守れない子が増えて、そうすると子ども自身の自己肯定感も下がる、そういう循環になっているような気がします。その何て言うんですかね、子どもの主体性を育てる、子ども自身が主体性を持った人になることがやっぱり将来生き抜いていく力のある人になっていくと思うので、そういったところの矛盾点についても、またちょっと議論していただけるといいのかなと思います。</p>
<p>東委員長</p>	<p>この後にちょっと和田委員に、もう一度、いま教員を教えられているということなので、二見委員が仰っていただいたことに、教員教育という所でどう向かわれているのかということはお伺いしたいなと思うのですが、その前に佐々木委員と白井委員にそれぞれお伺いしたいなと思うのが、二見委員の言葉の中で、学校のみならず、例えば地域の居場所とかってというような声がありました。</p> <p>やはり子どもの居場所というのは、当然学校のみならず、家庭もあり、そして学校や保育所以外の部分にもあると。それぞれやっぱり役割っていうのがあるなかで、主体性を持ったとか、自己肯定感の高いっていう所を、全部が全部学校の先生に任せるっていうのは、これは無理じゃないかなというふうに、学校の先生もやっぱり忙しいので、あれもやって欲しい、これもやって欲しいというのは難しいのかなと思うのですが、行政全体として、家庭であったり、地域の居場所、地域という所を考えた場合に、どういうアプローチをしていけばそういう自己肯定感を高めていけるとか、居場所ができたりするっていう観点があれば教えていただきたいなと思うのですが、白井委員、いいですか。</p>
<p>白井委員</p>	<p>ありがとうございます。まさに学校が安心、安全な場で無くなってしまった子どもばかりが、やはり来ているというところですね。それこそ、この学力の検査でいい点数を例えば池田市が求めていたとしたら、うちの学校を受け入れないと思うんですよね。もう全国から皆さん引っ越してこられると。当然やっぱりもう凸凹が非常にあるお子さん達なので、多分、受け入れることで市の全体の学力が多分落ちていると思います。</p> <p>ただ、不思議なことに不登校率は上がるはずなのですが、いっぱい流入してくるのに、私達10年間いた間に、概ね市の不登校の子どもの数は4割減ったと。やっぱりそこは、結局その子ども</p>

白井委員

達のやはり自己肯定感であるとか、それぞれに合った学び方をしっかり身につけさせてあげて、結局学校復帰をしているということなので、そういうことをいかに丁寧にやっていくかという所が、恐らく結果として出たというところなのかなと思っています。

非常にそういう意味では、本当に幅広い課題なのですけども、やっぱりその評価の仕方ですよね、この委員名簿にも書いてあるこの長い審議会でも議論したのですけれども、正直、おそらく初めてこの審議会の中で、ちょっと文部科学省も、かなりの転換をして、つまり今までこういう計画を立てるといいう時に、教育の計画を立てるとか或いは教育改革をするという時に、正直言って、今まで効果測定をしていませんでしたということを認めちゃったんですね。

エビデンスが全然無いのに、また次の改革っていうのを、結局、委員の皆さんの感覚で決めてしまって、また次もまた検証せずにまた次っていうのをやってきたっていうのを、文部科学省も反省をして、初めて今回の、4月からですね、施行されているこの教育振興基本計画というのには、それこそ学力の面って殆ど入っていないかと思っています。

今回の計画はやっぱり誰も取りこぼさない。やっぱりそれこそ学力自体もそうですけれども、全然そこに当てはまらない子ども達がかかなりの割合いるという所が、小中学校の現場のみならず、高校からも大学からも、本当に対応しきれませんというような悲鳴が上がっていてですね、やっぱりどうやって子ども達を取りこぼさない教育を全体として作っていくかということがかなり強調して議論をされたというところなのですけれども、ほぼこの学力に関しては、あまりその効果測定の中に入っていないというか、それこそ、その子ども達の自己肯定感であったり、或いはその生活リズムがどう改善されただったりとか、すごく効果測定し辛いけれども、でもそこにやっぱり頑張ってやってきましょうというような形になってきているんですよ。

やっぱりもうおそらく、国としても学力調査のこのテストを100点とったからといっても、それこそ、教育長仰ったように、仕事がありませんということも認めちゃっている時代なので、やっぱり特に我々はどうしてこういう課題のある子ばかりをやっているかという、例えば、池田市で中学校の先生方にヒアリングをすると、今、特別支援教室に大体1割います、なのでかなりの数です。

実は、本当は特別支援もっと個別支援をしなきゃいけない子ども達が、中学校でいうともう1割いると。本当は2割いるんだけど、もう予算がないし、場所も人材もないので、しょうがなく教

白井委員

室に行っているという状態であるという所なんですね。

そこで、我々が今こういう活動してるっていうのは、やっぱりその2割のお子さんの底上げですね、その子達がやっぱり本当に学校の中で何にもわからずに混乱をしていると。それこそ、学級崩壊なんか見ていると、やっぱりそういう子達が混乱しているのにみんなに巻き込まれて、全体が混乱してみたいなことが多くてですね、その2割の子達を丁寧に見てあげると、本当は、理想を言えばトップの2割の子達もちゃんと丁寧に見てあげることが1番いいのですけれども、まずは2割の子ども達をしっかりと見てあげると。彼らに、我々はオーダーメイドのカリキュラムと呼んでいるんですけども、すごいコストは正直、一時期かかります。だけどそこをやることで、それこそ学校復帰できるようになったりとかということで、将来的な社会コストはかえって下がっているというふうに思っていますので、そういうところで丁寧に見てあげると。

例えばこの先生方の声っていうので聞いていただいたのはすごく面白いなと思ったんですけど、美術でね、どうしたらよい点数になるかと、我々のところは、ものすごくみんな、それこそ学校では美術全然やらなかった、手も付けなかった、なぜなら自己肯定感低いから。でもうちに来るとみんな喜んでやるんですね。それはなぜかっていうと、評価をしないからです。せっかく自分達の自発的にね、創造活動をした所で、上手い下手だのっていうふうに言われちゃうと、やっぱりそれはもう萎縮してしまって全然手がつけられないという子達が、とにかく自由にといいと、もうみんな生き生きと喜んでやりますという所だったり、例えばその学力という面でも、それこそもう全然テストも書けないとか、全く学習にあたれないと、非常に拒否感が強いという子ども達を見ると、かなりの割合でいわゆる識字障害だったりとか、書字障害だったりとか、そういう所でも何度それこそ学校でやるような反復の練習をした所で一切身につかない。只々自己肯定感が下がっていくだけというようなお子さん達がいらっしやいます。そういう子達に対して、我々例えばITですね、タブレットとか、そういう子達も入力是可以するんですよ。計算できない子も今、1人1台もうスマホ持ってる時代だし、計算機で何とかなるよねと。それでタブレット入力だったりとか計算機だったり使ったりして、それでできる所を伸ばしてもらって、自己肯定感が上がった所で、ああちょっと、字も練習してみようかなとか、自分に合った形でですね、という形で、やっぱりちょっとその評価のあり方だったりとか、学力の捉え方というのを大胆に見直さないと、多分いけないという時代に差しかかっているのではないかなと

<p>東委員長</p>	<p>いうふうに考えております。</p> <p>ありがとうございます。本当に、いま最後に仰っていただいたように、大胆なというか、どうしてもやっぱり一番に学力っていうものを置くと、二見委員も仰っていただいたように、それに伴って課題を出し、やっていき、やっぱり一律テストという時点で、一律なものを出さないといけないので、オーダーメイドという形からどんどん離れていき、自己肯定感が下がっていくとそういう話をいただいたかなと思うんですけど、ちょっと同じ文脈で佐々木委員からも、そういうこれまでであった自己肯定感の話とか、学校以外の居場所とかも含めた辺りでご意見等あれば伺ってもよろしいでしょうか。</p>
<p>佐々木委員</p>	<p>私、スクールソーシャルワーカーのスーパーバイザーではあるんですけども、自分は福祉という枠組みだけの中に身を置いていません。置いていませんっていうのは、言い方は難しいんですけど、狭い領域で物を考えているのではないということです。子どもにとっての楽しい場所は大人にとっても楽しい場所だと思います。子どもだけが弱者っていう捉え方ではなくて、その主体性重視っていうのは二見委員と全く同様です。</p> <p>じゃあ、この主体性重視っていうのは、例えば先程委員長が仰った地域とかもそうなんですけれども、地域の人々の主体性をどう重視していくのか、それから、家庭の持っている主体性をどう重視していくのか、どうしても「問題」っていうことを考えると、問題を抱えている地域、問題を抱えてる家庭は弱者というふうな捉え方を私達はしてないでしょうか。</p> <p>ソーシャルワークでは、どんな方も必ず潜在的な力があり、強みがあり、そしてそれは必ず発達していくというのが理念にあります。「問題を抱えている弱者への支援」という捉え方をすると、それぞれの主体性が発揮できるチャンスをどこかで奪っているかもしれない。だから、いろんな施策自体がもしかすると人の持っている可能性を奪っているかもしれないという見方も必要だと思います。</p> <p>実は、私も元々中学校の教員だったので、教育って一体何なのかっていうことを考えた時に、やっぱり子どもの持っている可能性を最大限引き出すっていうのが大きなミッションだったように思うんですね。それが主体性重視っていう形になると思います。そもそも教育とは何なのかっていうと、私は教育というこの営み自体がですね、成長発達期の子どもにとって非常に重要な福祉だと思っているんです。</p>

<p>佐々木委員</p>	<p>本来学校教育が持っていたはずの福祉的な機能っていうものも、もう一度見直して、そこが上手に機能していくように、どう考えていくのかっていうことを考えています。</p> <p>ソーシャルワーカーとしては、先ず学校現場が教員にとってもいい職場であるっていう部分がないと、子どもの環境として非常に良くない相互作用が発生します。この相互作用がいくつか複数に重なってくると、非常に良くない交互作用が発生します。この交互作用がさらに家庭とか地域に対して、また相互作用を起こし、複数の相互作用が悪循環という交互作用を生み出します。これはシステム論で考えてるんですけども、社会ってみんなそういう形でできてるはずだと思うんですよね。</p> <p>先ず、どこから手をかけていったら仕組みが変わっていくのかって言った時に、今まさに、その教育として何をするかなんですけれども、アクティブラーニングが取り入れられた時に若手の先生何人かから相談を受けたんですよ。アクティブラーニングって言われても僕達そんなことしたことがない。つまり、今の教員がどういう教育を受けてきたのか、そこを抜きにしていきなりこういう教育できますって言っても、担い手の方がですね、慌ててしまうわけですよ。先生達自身がディスカッションする経験が無いんです。「先生、どういうふうに授業を受けてたの」、「座学、全部前向くんです。教員の授業を受け身」で。そういう状況の中では、どんなにいい教育方法が提唱されても、なかなか難しいだろうなと思います。</p> <p>それから、特に小学校で多いのが、担任の考え方重視です。担任の考え方重視っていうのは教員が主役ですが、学校においてはこういうことがあっても子どもが主役じゃなきゃいけないんですよね。そうするとある子どもにとって、前の先生は非常にいい状況を作ってくれたけど、次の担任の先生は考え方が違うから、その人のやり方でよろしくっていうのは、これは担任重視であって子ども軽視ですよ。</p> <p>それから、学校の先生っていうのは年に1回異動がありますから、何々先生がいる時にはよかったけれども、いなくなって残念だねっていうのは非常に不平等な考え方で、ソーシャルワーカーとして重視してるのは、学校の指導支援体制のシステム化です。人がいなくなっても、一定子どもにとって、大人にとって好循環で回っていくシステムを組織の中にどういうふうに作っていくのか。</p> <p>それから、先程、中原委員が観察っていう、UQより観察って、私もそのとおりだと思っていて、UQはどうにでも答えられるんです。だけれども、日頃の観察は、それもその一定の所の観察でなくて、</p>
--------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

<p>佐々木委員</p>	<p>様々な場所、様々な人の視点での観察を結集した時に、どういう子どもの姿が見えてるかが大事で、ソーシャルワークで重視するのは包括的なアセスメントといいます。包括的にアセスメントをしていくと、その子の学力や発達の特性や、或いは家庭の状況っていうことが、学校の中での情報収集でもかなり見えてきますよね。</p> <p>それを踏まえた時に、組織としてどうしていくのか。担任はどの役割を担うのか、学校として預かっている子どもさんに対してどうしていくのかっていうことが、きちっと降りているような組織を持つてる学校って、たとえば実際自分も関わった学校では、数十人いた長欠児童のうち少なくとも不登校はゼロになったんです。</p> <p>これは、本人や環境への働きかけを行うなかで、子ども達が学校に来たいと思ったからです。じゃあ何で来たいと思ったのかっていったら、勉強がわかる、学校は楽しいと思ったからです。そういう状況を、スペシャルな学校しかできないのかっていったら、決してそんなことはなくて、やっぱり個々の学校が持つてる力をどういうふうに引き出していくのかによります。そのためにはですね、四條畷市の取組みの下に、各校の実態があると思うんですよね。各校の学校長がですね、各校毎の地域性と学校の抱えてる課題を明確にし、分析し、それに対する明確なビジョンをきちっと作る。これを自己満足じゃなくて、やっぱり第三者がしっかり見るっていうような、検証に近いのかもしれないけど、そういう中で、今年度の到達目標、その到達目標が一体何なのかっていうようなことが無い限り、どんなにいい施策も費用対効果が悪いのではないのかなというふうに思っています。</p> <p>私自身は、先程、副委員長が仰っている中でいうと、やっぱりアートとサイエンスの両輪の重要性は、自分の仕事の中でも常にソーシャルワーカーには言っています。このサイエンスがアートを上回るのではなくて、やっぱりサイエンスというのは、個々の持っている個性であったりとか、個々の持っている強みをより生かす、生かすために使わなくてはいけない。今までの学校現場には「分析」が無いんです。この分析っていうような営みを入れていくだけで大分変わるんじゃないのかなと。先程の包括的なアセスメントっていう言い方をしましたが、これも情報収集をして、情報をその項目ごとに整理をして、個々の情報が何を意味しているのかっていうことを分析して、総合的に包括的に全体状況を理解していくっていう、このプロセスを包括的アセスメントといいますけれども、それが定着している学校は教科についても分析があるし、先程の子どもの個別の状況について、どこがわからないのか、なんでわからないのかに</p>
--------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

<p>佐々木委員</p>	<p>についても、やっぱり分析しようっていうような姿勢が、みえてくるのかなっていうふうに思っています。</p> <p>今、居場所について、そこも含めますとね、虐待対応の施策が充実されているっていう部分は非常にありがたいんですが、ただ見落とされてる所があると思います。実は教職課程の中に、正式には児童虐待についての学習は入っていないと思います。</p> <p>ほとんどの先生方は、虐待とは何なのかっていうことを詳しくわからないまま教壇に立ちます。四條畷市の規模でしたらね、悉皆研修で虐待研修を繰り返すことっていうのは決して難しくないと思うんです。この知識があって初めて虐待を発見できる。発見するのは校長じゃないんですよ。個々の先生なんですよ。個々の先生の知識が無かったら発見できないんですよ。そういう所にも、もう少しこう予算を作っただけだとありがたい。包括的なアセスメントしていった時に、立ち歩く子どもを見たらADHDだっていうふうに決め付けるんじゃないで、もしかすると虐待によるADHDライクかもしれないとかね、そういう分析もできてくるかもしれないので、ちょっと委員長のご期待には答えられないような回答になりましたけれども、普段そんなことを考えながら、仕事をしています。</p>
<p>東委員長</p>	<p>ありがとうございます。</p> <p>まさにいまお示しいただいたような所で、白井委員の所にも繋がってくるかと。オーダーメイドのカリキュラムという言葉がありましたし、中原委員の方からもその観察という所があって、やっぱり、それぞれしっかり先生達が子どもを中心に考えていくと仰っていただいた中で、学校現場が先生達も主体性を発揮できる状況にあるのか、これは結構大きなことだなと思っていて、ちょっと藤原委員に聞く前に、先にすみません、ちょっと時間のこともあるので、もう一度、和田委員にお伺いしたいなと思うのですが、今やっぱり学校現場として、こう包括的なアセスメントみたいな形でしっかり観察をしたり、その子その子の特性を生かせるような形で、また先生の知識っていうのもしっかり高めていかなきゃみたいなお話があったのですが、現時点で教職の育成をやられてるお立場として、やっぱりそういうふうな先生が力を発揮できるとか、そういう先生がたくさん増えていくっていううえで、やっぱり市教委というか、市としてどういうことができているんじゃないかっていうような観点でございますでしょうか。</p>
<p>和田委員</p>	<p>今、教育の課題の中でね、例えばいじめがあり、不登校があり、</p>

<p>和田委員</p>	<p>虐待があり、そういう課題を教えています。そうしますと、結局あれもしなきゃこれもしなきゃということで、非常にすごく教員の仕事って大変だなっていう意識だけが、私どもの大学の学生の中には醸成されています。例えば教員養成課程に入ってきた段階で、1年の段階では9割の人が、その時点でも、1割の人はもう教員にならないと決めてるんですよね。教育大学ですが、国立大学だから来たって言う人がいるんですよね。</p> <p>2年生になると8割になって、3年生になったら7割になるという状況なんです。だんだん心がですね、最初は教員になりたいという気持ちがあったんだけど、だんだんその実情を聞く中で気持ちが薄れてきてしまうようです。しかし、教育実習をする3年生の時に一定、また上がるんです。子ども達とのふれあいの中で、やっぱり先生っていいなっていう気持ちになって、そこで採用試験を受けていくというのが、今、教員養成の実態です。</p> <p>佐々木委員とか白井委員のご意見、二見委員のご意見聞いてまして、私も常々考えていたんですけど、今、教員、学校があれもしなきゃこれもしなきゃってなっているところ、大人が何とかしなきゃと思っているところが、何かこうジレンマというか悪循環に入り込む思い込みじゃないかなと思っています。</p> <p>使命感なんですよ、すごい使命感なんですけど、その使命感が強く働き過ぎていることが、結局悪循環に落ち込ませているんじゃないのかなと考えています。これは、働き方改革と結びつくんですよね。</p> <p>なので、もっと子どもの力を信じること。例えば、私達が小さい時は、近所の中でガキ大将がいて、その人の命令下のもとで生活してきたわけです。そういう子ども同士の能動的な関係を作るところが、今弱っていて、先生が全てやらなきゃいけないところになってしまっていることが問題と思っています。</p> <p>これからの新しい時代は、子ども同士が繋がる。子ども同士の切磋琢磨といいますか、いいことも悪いことも含めてね、子ども同士の中で解決していくんだっていうような教育を進めることで、それは結果としては、社会に出てから人間関係を円滑に行っていく子ども達に育っていくと思います。時間がかかるかもしれないけど、そういうふうな教育をこれからはやっていった方が、良い子どもたちを育てていくことになるんじゃないかなと思います。</p> <p>この前、NHKでやってたんですけどね、東京のある中学校がね、大胆なことをされてるんですよ。ご覧になられましたか。あれはすごいんですよね。私も映像で見たんですけど、すごいなと思っています。</p> <p>あそこまで大胆にやるというのはなかなか地域住民の方の、ご理</p>
-------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

<p>和田委員</p>	<p>解が得られるかどうかはありますけれども、やっぱりそれ位の発想で、もし市でやるっていうのであれば、もうやっぱり小学校からね、先ずは。</p> <p>小学校からやっぱり子ども達の間関係作りをやっていくことがいいんじゃないかなと思います。ピアサポートっていうそういう手法もありますので、それを導入することで、子ども達が日頃自分の意見を言って、腹立つねんということも言えるような関係作りをしていくということが、いずれはいいことに繋がっていくように思います。</p>
<p>東委員長</p>	<p>今日のこれまでの議論からいくと、子ども達も先生とかから、学力向上のために、課題とかがいっぱい出たり、習い事とかで子ども達も忙しいと。先生達も過去には無かった課題をいっぱい解決しないといけなくて忙しいと。みんな忙しい中で、現状になってしまっているというのがおそらくあって、でも、さらに忙しくなってしまったが故に、解決できていない課題を解決しようと思って使命感に燃えてさらに忙しくなって、こんな循環に陥っているからこそ、観察であったり、子ども子どもに合った寄り添いができていないっていうのが、今のところの話ではきているのかなというふうには思っています。</p> <p>そういうふうに話をいただいている中で、今日、敢えて藤原委員に来ていただいているのは、今、大学からこう就職に向けての学びをしてもやっぱり遅くて、それより前の段階から、キャリア教育という観点から見るとこんな子ども達に育てほしいというような、この中で今回はすごく変わったお立場で来ていただいているのですけれども、今までの議論も聞いていただきつつ、どうでしょう、学校現場とかに小中学校とかも含めてどういうふうなアプローチを、就職という支援というところも含めてお考えがあれば教えていただければと思います。</p>
<p>藤原委員</p>	<p>今までの議論を聞いていて、学校の先生は、なんて大変なんやっでとても思いましたけれども、ちょっと違う立場で来てるので、敢えてちょっと違う立場の発言する方もいいのかなと思います。</p> <p>さきほどから評価のあり方とか学力の捉え方って本当難しいなと思うんですけど、ざっくり言って、企業さんの持つてる評価って、やっぱり価値創造してくれる人がいいよねっていう所の能力を身につけて欲しいということがあると思うんですね。</p> <p>先程、植田教育長が出された価値創造する人が、上の方にいる図</p>

<p>藤原委員</p>	<p>がありましたけど、あの図だと割と砂時計みたいな形になってましたけど、価値創造する人は多分もっと実際の母数は少なくて、少ないですよ、それで下の方にいる低賃金で、AIとかがやるような、その下の方にいる人っていう所の方が、母数は多分多いんだろうなっていうのは実際なんですよ、現実的には。</p> <p>では上じゃないと駄目なのかというのは、またそこは違うと思うんですよ。上じゃないと駄目、まあ経済的にはそういう人達は多分お金を儲けるんだろうと思うんですけど、そうじゃなくって、それぞれの所にあるそれぞれの価値っていうのは、やっぱりちゃんと認めるような人が出てきて欲しいなっていうふうに思うんです。</p> <p>なぜならばなんですよ、先程大学生が1割位未就職のまま卒業するよねって話があったんですけど、大学卒業時点で未就職若しくは不安定就業だったら、不安定就業まで入れると、7人に1人位がそうなんですよ。彼らがなぜそうかっていうと、やっぱり、下の方にいるところの仕事の重要性っていうかをあんまりご承知されていないし、していないからそういう情報取りにもいっていないように思います。就職支援の場で、就職できていない人に何したいのかなっていうふうな話を聞くと、大学まででキャリア教育受けてきてるんですけど、業界とかね、仕事のことは結構語れないんですよ。</p> <p>事務職になりたい。なんでって聞いたら、やっぱり楽そうとか、中でできるとかっていうような話になって、事務職で実際に必要なコミュニケーション力とかね、そういった所の、普通に知ってるって、私位の年代になって思うようなことを、実は知られていないような感じがして、それをどこで身につけるのかなって思うんですよ。大学になって、そういうことを身につけるのかということももっと違うように思いますし、職業とかいろんな職種の話っていうのは、もっと若い小中学校の時から、身につける機会があればいいのかなって本当に思います。</p> <p>それをただ、今の忙しい先生にそこまでさせるのかという話が別途あってね、そういう所を、これも割ともう自由に言っていると思うんですが、そこまでのね、いろんな職業、業種とかの理解の話までを先生にさせるのか、それとも、もっと他の機関の力を入れて、それを取り入れていくのかっていうのは、方法論としては、いろいろまた検討の余地があるんだろうなというふうに思います。</p>
<p>東委員長</p>	<p>仰るとおり、やっぱり就職したい所ランキングみたいなものを見ても、聞いたことがある名前前の企業がとりあえず並んでいるみたいな。じゃあ、実際どんなことやってるのっていうのは、よくはあん</p>

<p>東委員長</p>	<p>まりわからないとか。</p> <p>私、先日千葉市の市長さんとお話をさせていただいて、中学生に就いてみたい職業ランキングを継続して取っていたらしいんですけど、年々変化があったと。聞いてみると、職業体験で行った場所の行きたい指標が高まっていっていると。でも、実際に職業体験で行く所って、花屋さんとかパン屋さんとか接客とか小売になってきているので、その割合がどんどん高まっていったみたいなお話があって、まさに行ったことのある、経験したことのある所に行きたいみたいな状況になってるのかなと。</p> <p>今、藤原委員に仰っていただいたように小中学校ぐらいの時から、あなたの個性が生きる仕事っていうのは、今まだ知らない分野にたくさんあるんだよと知ってもらえるような場がもっともったあったほうがいいと思いますし、なんかこうテレビで聞くだけの所に行かないといけないみたいな状況を打破していかなければいけないんだけど、それを先生にお願いするのは、酷な話ですよと。</p>
<p>藤原委員</p>	<p>就職支援をしててそれ酷だなんて思うのは、ご両親と、親御さんの希望と必ずしも一致しないからなんですよね。就職支援していて本人が望むことと、正解が一致してるかどうかで非常に日々悩むところがございます、希望どおりのことを提供すると、それを必ずしも就職に結びつかなくなったりします。</p> <p>就職に結びつくのは全て正確かといわれるとこれまたしんどい所あるんですけど、就職という場面において本人が希望どおりのことをしたら、なかなか難しいよねっていうのが現実的には出てきていて、悩んでいるという状態っていう感じですね。</p>
<p>東委員長</p>	<p>今の話で、ちょっと中原委員にもお伺いしたいのですけれども、今、学校経営の立場にも入られていて、新しい取組みをしていくと、保護者の方が思っていることと、学校に求めていることのギャップとかも出てくるのかなと思うのですけれど、それはそれぞれの学校の中でマネジメントをしていただくというのは当然あるのかもしれないのですが、行政とか、教育委員会としてどういうふうに、親御さんと子どもの思っているギャップ、家庭内で解決してくれって言っちゃったらもうそれで話終わってしまうので、どういうふうにもと、同じ方向性に向かっているのかどうかという所と、その教員が忙殺されてしまっている所に対してどういうアプローチができるのか辺りちょっと教えていただければと思います。</p>

<p>中原委員</p>	<p>まずは保護者の皆様と認識を合わせる点は重要です。対話の機会 で、私自身が重要視したのが、要望を受け入れる場所ではないこと です。お互いの意見を適切に共有する場所であって、事実と感情は 切り分けて、知っている情報について共有する。知っている情報の 情報元についてもお話を聞かせていただくうえで、20年前の自身 の経験と現代、そしてこれからの時代は違うという前提を整理しま す。</p> <p>例えばその大学入試の点で、大学入試の問題の変化についてもメ ディアで出ている表層的なところだけの話が多く、昨年度の問題を 知らないという方もいました。大学入試の問題が変わっているのに その事実を適切に捉えていない。そういうコミュニケーションミス を解消するためにも、議論の前に、情報収集を適切にすることは保 護者の責任だと言います。そうでないと、価値観の水掛け論になり、 誰のためにもならないどころか、それは最終的に子どもに影響しま す。私は学校説明会でも必ずこの話はします。</p> <p>また、学校改革において、教職員がいままでの業務や習慣を捨て られるかが重要です。今、担っている業務が本当に必要なのかを徹 底的に議論する。まずは、今の業務がすべて無かった場合、児童生 徒に不利益になるものは何かを考え、説明ができる業務のみ残す。 そうすると、札幌新陽高校で、私が納得できたのは、教務と進路サ ポートのみでした。進路サポートは進学指導ではありません。生徒 自身が人生を見据えた生き方を問う中で、卒業時の動向を決断する サポートです。</p> <p>学校改革を妨げるのは、大人の思い込みです。基本的に今までの 仕事を手放す勇気が必要で、その文化を醸成する管理職の覚悟が必 要です。麴町中学校の取組みが取り上げられましたが、日本全国で 様々な取組みをされている場所はあるので、変化は可能です。何も 特別なことではありません。</p> <p>また、教員の授業の在り方も根本的に変化する必要があります。 学習指導要領は基礎的な概念であり、現場単位で授業の在り方は変 化可能です。何も縛られることなく学習指導要領を理由にして変化 できないという方は、適切な知識がない方です。</p> <p>そういった面でも学校現場は最もクリエイティブな場所なので、 現行の制度であっても、覚悟次第で直ぐに変われるというのが現状 です。</p>
<p>東委員長</p>	<p>ありがとうございます。今日、既に1時間半少しと経過していく 中で、恐らくそれぞれの委員がそれぞれのご識見の中で発言いただ</p>

<p>東委員長</p>	<p>いた中にも、共通項がたくさんあったかなと思います。</p> <p>今後の第2回に向けて、そういう共通項を絞っていきながら、理念を言語化していけたらというふうには思っているんですが、逆に、本当に今回様々な委員の方から来ていただいておりますので、今この議論の流れとは例えば全然別に、こういう観点っていうのがもっとあるんじゃないかとか、子どもの主体性というもの以外に、例えばこういう所、観点があるんじゃないかとか、別の観点とかがあれば、まだ時間ありますので、さらにこう広げていけたらと思うのですが、もし委員の中であれば、仰っていただければと思います。</p> <p>順番にいいですか。では、佐々木委員。</p>
<p>佐々木委員</p>	<p>ちょっと先程学校が多忙だっている所に、もしかして誤解があるかなって、私はすごく思っていて、まさに中原委員が仰ったとおりで、本当に教育の場として必要な業務と、何でそれ教員がやらなアカんのっていう業務があることは間違いありません。だからそこを再度精査してみるっていうことはすごく大事なんですけど、私この間の動きの中で、すごく危惧してる部分があります。</p> <p>それは例えば、授業づくりにおいても教育においても絶対に手放しちゃいけないのが、子ども理解なんです。この子ども理解という最も重要な営みを、私達スクールソーシャルワーカーも含めた他の専門スタッフに投げてしまうという、勘違いしてる学校が増えていきます。</p> <p>自分も教員をやっていましたって先程申し上げましたけれども、やっぱり子ども理解をしっかりとするっていうことは、その子とそれから教員との信頼関係を固くするんです。それがあって初めて授業の効果は出ます。</p> <p>人間誰も信頼してる人の言葉はしっかり耳に入れますけど、信頼感が無い人の話はもう頭上を通り過ぎるだけなんです。その部分をいろんなその外部の人の力を借りながら、どうやってその子どもとそれから教職員、家庭っていうもう最低限この三角の関係が強くないとですね、本当の意味での教育っていうのは効果出ないんです。</p> <p>もう1つが、いろんな統計も出ていますがけれども、先生方の多忙感を、確か栃木県かどこかの教育委員会が何年前にアンケート調査したんですけども、先生達が多忙を感じる時っていうのは、自分がやってるものの意味がわからない、それから自分がやってる業務を同僚や周囲が認めてくれない。それを裏返すとね、見通しを持って自分は何のために今この業務をやっているの、その業務が子ども</p>

<p>佐々木委員</p>	<p>ものためになるんだっていう見通しを持った時に、少なくとも負担感を感じてないんですよ、アンケート上。</p> <p>それから、自分がやろうとしていることを同僚や周囲が応援してくれたりとか、認めてくれている時も同様です。負担感＝多忙感ではないのかもしれませんが、でもやっぱり心理的にはそこが非常にリンクすると思うんですね。</p> <p>繰り返しますけど、本当に必要な業務なのかを見直すことと、それから、もっとう包括的な体制になれば、1回で済むことを無駄に2回3回やるということもなくなります。たとえば、ある子どもへの対応を検討する会議をA部会でもやりB部会でもやりC部会では全然違う方針になるって、これももう学校混乱するだけなんですけれども、こういうことをもう一度見直しましょう。教師が見通しを持って子どもに関わっていきけるっていう状況を作り出していったらね、無駄な多忙感はずっと今の業務の中でも、今の状況の中でも減ると思います。</p> <p>だから、あの先生達は仕事が忙しいから取ってしまいましょうっていうそんな単純なものではないので、ちょっとお話をさせていただいたものです。</p>
<p>東委員長</p>	<p>ありがとうございます。</p>
<p>二見委員</p>	<p>少しだけ。教員の多忙っていうところの話だったんですけど、現場にいて思うのが、保護者、ご家庭からの学校とか教員への期待が高過ぎて、ああしてほしい、こうしてほしい、これはやってほしくないってことがたくさんあって、教員の本来の業務じゃなくても、やっぱり子どものため、保護者の安心感のためと思って、一生懸命やっておられる先生方がたくさんおられます。</p> <p>そこでは、先生方は、こんなほんまは自分たちの業務と違うのになんか文句言いながらではなくて、本当に皆さん一生懸命やられていて、それに感心するんですけども、そういう意味では、保護者さんご家庭とかちょっと話違うかもしれませんが、今のご家庭に対して、地域としても、実際はこういうふうになっていくんだという、例えば四條畷市がこれから作っていくものについて、学校現場とか教育現場だけではなくて、地域の人達にも理解をしっかりと伝えていっていただきたいと思います。PTAとか保護者の方へ研修をすると、研修の内容について、そういうこともあるんだなってわかってくださってやっぱり一定理解度が上がりますし、先生方がいっぱいやらされている、保護者からの意向もあってやらなければな</p>

二見委員	<p>らない場面が、本当にたくさんあるので、先生方が自ら忙しくされているような部分も実際にはあられるとは思いますが、やっぱり皆さんの期待を受けて、特に地域やご家庭からの期待を受けて頑張らなくてはというふうに思っ、現場の先生が忙しくなっているというような所もあるということ、地域において全体の共有と言っていいんですかね、そういったことが必要なのかなと思います。</p>
東委員長	<p>ありがとうございます。さっき中原委員が仰っていた学校は要望先みたいなどの考えにちょっと通ずるところがあるのか、でも本当はそうじゃないはずなんですね。</p> <p>ともに子ども達にとって良いものをという、本来は同じ方向を向いてやっていくはずが、要求できない、できるっていうようなことになってるのが一因なのかなと思うんですけど、ちょっと中原委員からいただきたいんですけど、その前に白井委員にその地域との関わりとかっていう所で、ご知見あれば教えていただきたいと思うんですけど。</p> <p>要は、例えば公設民営で初めてやっていくってのは、恐らくいろんな反響とかあったはずなんですね。今、それだけ成功されていることは、恐らく地域の方々も理解が進んでいっていると。どういうふうに進めていかれたんですかね。</p>
白井委員	<p>それこそ先生方の、多忙感という意味で、15年前はそれこそ池田市でも、不登校の子ども達がたくさんいると。家庭訪問か何か全部担任の先生がやられてるという状況でした、という所に、これは実は池田市の市長さんからのトップダウンで、我々が来ると。</p> <p>最初は本当に黒船っていう扱いです。本当にそれこそ先生方からすると、今まで自分達のやってたことを否定されるんじゃないかという恐怖感ですよ、恐らく。</p> <p>私、市長さんに連れられて校長会とかいろいろお話しさせていただいて、もう本当に先生方頑張ってるのはもう重々わかっているし、決してその否定とかっていうんじゃないで、でもやっぱり先生方もそのクラスに、各クラスに不登校の子がいるという、ものすごくやっぱりご負担もかかっていると。そこのご負担も少しくださいという所から始めていったんですね。</p> <p>最初はやっぱりそれでも、本当、人攫いみたいな言われ方、別に学校から連れてきたわけじゃないんですよ。家に通って通って、何とか信頼関係を作って、何とかうちのスクールには来られるようになったっていう子に対しても、残念ながら、あそこにお世話になっ</p>

<p>白井委員</p>	<p>てますみたいなことを学校から言われるということがずっと続いていて。ところが学校の先生の方からですね、本当に2、3年経って、やっぱり子ども達が学校復帰し始めてからだと思います、本当にこういう場所があると、こういう所をちゃんと活用しよう。やっぱり子ども達にとっては、大人とこう信頼関係を作るという、実は初めての経験をしてるって子ども達が多いんだ、そこにちゃんと学校も関わろうよと言う形で、やってくださるようになって、そうするとやっぱり子ども達の学校復帰もすごく早くなったんですね、そういう学校の先生が関わってくださるので。</p> <p>そういう循環ができてきたというところで、非常にその学校との関わりも我々も連携しやすくなりましたし、今も学校の先生方がしょっちゅう来ますし、例えば、試験なんかも学校で受けられる子は受けに行くし、どうしてもやっぱり受けたいけれども受けられないという子に関しては、うちのフリースクールの方に試験監督、1人のために学校来てくださったりとか、そこまでしてくださるっていうことになると、やっぱり子どもの方も、原籍校との繋がりっていうのをちゃんと実感するんですよね、というので、やっぱりものすごく、今その学校復帰のタイミングが早くなってるという状況です。それがある中でやっぱり地域との関わりっていうのもすごく良くなって、それまでは本当孤立というか、そこまで関わりもなかったのが、初めてその廃校ができて、それこそ少子化、高齢化が進んでる街だったので、子ども達来てくださいというので、ほんとフリースクールって今まで反対運動しか受けたことがないのに、初めて誘致をされまして、それを呼んできたからには責任があるっていうことで本当に地域のお年寄り達が、ここは福祉の街になるんだと、本当に今まで傷ついた子供達を受け入れる街になるんだということで、皆さんでそれこそ毎日のように掃除に来てくださったりとか、地域にいらっしゃる方々が先生としてね、和菓子作りだったりとか、俳句教室、まあかなり渋いですけど高齢者の街なので、そういう形で来てくださるようになったりとかっていうことで、そうするとやっぱり子ども達の自己肯定感が上がるんですよね。</p> <p>地域に自分達が受けられているということで、本当にそういう循環が働いていくというのが、この15年の間の流れだったのかな。本当に1つの事例にすぎませんが、はい。</p>
<p>東委員長</p>	<p>恐らく、いま手短にはお話いただいたんですけど、恐らくこう言葉にできないご苦労も、恐らく15年間の間でたくさんあったんだと思うのですけれども、最終的にはそういうフリースクールと学校</p>

東委員長	<p>の繋がりだったり、地域との繋がりというのが今は好循環になってきているっていうことですね。</p>
中原委員	<p>今のお話とすごく関連する所かなとは思っております。</p> <p>先程の最後のページのこの役割というところですね、仕事の内容とかもありましたが、最近であると、教育機会の確保などもあり、白井委員が取り組まれている事業でも、この履修と習得の関係等も、改めて協議し、認識を深める必要があります。例えば不登校というワードがありますが、個人の課題ではなく多くの子どもが向き合っている事実の場合は、システムが現代に状況に合っていないということです。</p> <p>この56,000人の都市で、全体がラーニングオーガニゼーションといいますか、生涯学習の拠点になり、学校の機能が発展する設計ができたらいいなと思いました。</p> <p>四條畷市で取り組まれているモデルハウス事業などをうまくコラボレーションできれば、様々な学習の場所、機会、そして産業と連携した社会に開かれた教育課程、プロジェクトベースラーニングを小中学校の段階から可能になり、子ども達の対人関係を築く力、利害関係を解消する力、協働する力など、ライフスキルの向上にもなるかなと感じています。</p> <p>最後に伝えたかったのは、市長がこの場に委員長としておられるなかで、教育課程特例法も含めて今までになかった市全体で、生涯学習がなされているような運営をめざしていただきたいと感じています。</p>
東委員長	<p>ありがとうございます。</p> <p>今、軽く中原委員からご紹介いただいたのは、若者の中でなかなかこうちょっと仕事に就けなくて、家から出れなくてって悩んでいる方に、うちの市にある府営住宅で空きがあるので、NPOの方がリフォーム等を行って、そこになかなか家を出れないという若者が来て、市の商工会とかと連携して市内の仕事を紹介してっていうようなプロジェクトを取り組んでおってですね、これは確かに本当に、それぞれの主体がそれぞれの強みを本当に活かしています、これは、NPO法人のハローライフさんという所がやっっているんですけども、ただ仰るとおり、行政としてもできることがあって、それぞれの主体者ができることがあって、これは若者となっておりますけど、子どもの文脈でもあるんじゃないかなというふうに思っています。</p>

<p>東委員長</p>	<p>時間も少し経ってきたんですが、今どちらかというと小中高とフォーカスになってきたのですが、教育という観点をみるとやっぱり幼児教育っていうのも当然フォーカスの中には入ってきておりますし、やっぱり現代でいくと、幼児教育こそ本来は最も行政としても予算であったり、人であったり割っていくべきじゃないかっていう議論があるなかで、小学校に上がるまでのなかで、こういう観観点とか、やっぱりどうしても家庭の比重が非常に高い領域に、幼児教育はなってくるのですが、何かもしかしたら専門が少し外れる分野もあるかもしれないのですが、それぞれこれまで経験されていくなかで、市として行政として、教育委員会のちょっと守備範囲にはなるのですが、行政としてできる幼児教育の文脈で、こういう取組みがあった方がいいのではないかとか、こういう所はもう少し強めていった方がいいのではないかと、もしご意見ある委員がいればいただきたいなと思うのですがいかがでしょうか。</p>
<p>二見委員</p>	<p>幼児教育というのは、子ども達だけでなく、先程仰られていたように家庭で担う比率が高いということですので、是非ともご家庭への家庭教育ですね。実際に、難しいかもわかりませんが、私の思ったことを伝えさせていただくと、小さい時からのご家庭での教育のあり方だったりとか、価値感みたいなことがどんどん小学校や中学校に広がっていくので、親御さん達も小中と進むにつれて、不安になったりしんどくなったりされるような所もあり、そういったことを含めて幼児の間にですね、しっかりと子どもと一緒に学ぶとかいう形で、研修なり教育なりっていうようなことを、具体的にこうと言えないですけども、そういった研修や教育があればと思います。それは福祉とか大分絡むことだろうとは思いますが、1番最初に仰ってたように教育と福祉というのは、切っても切れない話ですし、教育現場こそが福祉の1番発揮できる場面だということも仰ってたとおりで、実際にその家庭教育を無しにして、学校教育ということはやっぱり難しいと思いますので、子どもが小さい時程、重点的にやっていただけたらいいなというふうに思います。</p>
<p>白井委員</p>	<p>それとの絡みで、さっきちらっと市長仰られたネウボラ、私もフィンランドへ見に行ったんですけど、これはやっぱり多分すごくこう、どれ位徹底的にやられてるかによるんですけど、すごく今仰ったことについて有効であろうと思っています。</p> <p>というのも、やっぱり、その例えば課題を抱えてるお子さんの親御さんが課題を抱えているというのは実感としてあります。</p>

<p>白井委員</p>	<p>でもそういう時に例えば、朝、子どもを起こして、朝ご飯を食べさせて、学校に行かせるっていうやり方がわからない。さぼっているわけじゃなくて、本当にやり方がわからないので、結局ちゃんと支援を、親支援をしてあげないといわゆる望ましい環境というのが作れないという親御さんが必ず一定数いるという前提のもとにやっぱりずっと切れ目のない支援ですね、ちゃんとその子どもの状況も切れ目なく観察していきながら、親御さんのことも切れ目なく支援していくという体制を徹底的に作っていただけると今仰っていただいたような課題にかなり有効なのではないかと思います。</p>
<p>佐々木委員</p>	<p>さっきのアセスメントっていう切り口で言いますとね、幼稚園、保育所もやっぱりアセスメントしないんですよ。</p> <p>ただ、非常によく書いてくださってて有効なのが、保育要録です。個々の子どもについて記述しているものが小学校に送られることになっています。</p> <p>幼稚園指導要録は、教育委員会が管轄しておりますけれども、幼稚園指導要録よりも保育要録の方がずっと役に立ちます。それをちゃんと小学校がきちっと入学前に、それをきちっと活かしましょうっていうようなね、それが市内の全体の中での位置付けになっていくっていうことがすごく重要かなっていうふうに1つは思っています。もう1点。よく知ってるんですよ、幼稚園の先生、保育所の先生は親御さんのこと、子どものことを。だって朝夕会うんだから。</p> <p>子どもの年齢が低い程、親と学校の先生っていうのは会う回数は多いわけですよ。年齢が上がると、親と会う回数減るんですよ。そうすると会う回数が多い時にしっかりとアセスメントをして、何がどうなのかっていうことをわかりながら対応して行って、その実績の積み上げをちゃんと小学校の方に、それから小から中という辺りをきちっと繋ぐシステムをね、定着させていくっていうこと。</p> <p>もちろん子育て支援には、私は今の10倍位予算つけてもらってもいいかなと思うんですが、ただ先程のリーチアウトも含めながら、本当に問題を抱えていらっしゃる方は、やっぱりこぼれます。</p> <p>どうですかって差し伸べた手を握る力も出てない人、握り方もわからない人が多分ずっと残っていくんですね。しかし、包括的にアセスメントすると、どうしてこの人は援助の手を握ることができないのかっていうことも見えてくるので、そこまで深めていった上での施策を回していくことが必要なかなっていうふうに思っています。</p> <p>ただそれは、私はさっき費用対効果って言いましたけれども、費</p>

<p>佐々木委員</p>	<p>用対効果をより有効にしていくっていうシステムと、そうは言っても、やっぱり人手は非常に必要になってきますので、今の相談員さんの人数でいいのかとか、保育士、保育士さんもそうですし、保健師さんもそうですし、1人の人がどれだけ効率的にやろうとしても限界があるっていう部分を考えた時に、人員の確保っていうところも考えていく必要があるかなっていうふうには思っています。</p> <p>実は中教審のいろんな部会の中での議論をみていて、教員の働き方改革っていうところ、少しみた時にですね、これ間違ってるぞと思ったことがありました。それは、学校には指導要録っていうものがあるんですけども、実は私達、子ども理解をしていく時に、自分もそうでしたが、公文書なのでもう本当に真剣に書くんですよ。</p> <p>ですが、その指導要録を多くの学校現場は使って無いんですよ、学校の先生は年度末に開くんですよ。でも本当は日常の業務の時に、前の人がどういうふうにもその子を見て、どういうふうに記載してきたのかっていう情報をしっかり使うことによって、非常に効率的に次の段階に進むことができるんですが、ある中教審の部会の中の委員さんが「指導要録使って無いからもっと簡素化しろ」という意見を出したんですよ。</p> <p>いやそれ違うでしょと。逆に何で使っていないのかを検証する必要があるんですよ。非常に役に立つんですよ。もし国の方針がそういうふうの流れちゃうともう非常に私のがっかりで、役に立つものを使っていないのであれば、なんで使うことになっていないのかを検証して、役に立つことを役に立つものとして活用できるようにすべきです。データですからあれは。</p> <p>こういった部分を、是非四條畷の方は、そこをちょっと焦点当てて欲しいなど。要は、切れ目の無いっていうのは、文書自体もそうなんですよ。そこもぜひ考えていただきたいなと思います。</p>
<p>東委員長</p>	<p>ありがとうございます。本日、多岐にわたる観点から、ただやっぱりそれぞれの委員さんがご発言いただいている内容というのは、どこかしらやはり共通点のある話が非常に多いなというふうに本日感じています。</p> <p>もう時間もかなり差し迫ってきております。本日いただいたご意見というものを、我々として体系化、そして言語化して、次回第2回はそれを深化、深めていくという会にさせていただいて、3回目で成文化していくという所をめざしているんですが、もし委員さんの中で最後もう一言、未だ言い足りていないというものがあれば、いただけたらと思います。もし無ければこのまま閉じますが、よろ</p>

東委員長	<p>しいでしょうか。</p> <p>(意見なし)</p>
東委員長	<p>もしよろしければ、本日の未来教育会議は閉じさしていただくというふうに思います。</p> <p>最後事務局からいいですか。</p>
事務局 (総合政策部長)	<p>はい、それでは次回のご連絡をさせていただきたいと思います。</p> <p>次回、第2回の会議は1月29日の午後7時からでよろしくお願ひしたいと思ひます。先程ありました、次回は本日の議論を踏まえた上での各課題の現状や課題報告をさせていただくとともに、少し教育の方向性についての具体化が図ればなと思ひておひますので、今後ともよろしくお願ひいたします。以上です。</p>
東委員長	<p>これをもちまして令和元年度第1回未来教育会議を閉会いたします。本日は本当にご多忙の中ありがとうございました。</p>

